

# 一代雑種 (B×L) のと殺適期試験

原田満弘・松元計士・横山豪郎  
(鹿児島県養豚試験場)

HARADA, M., MATHUMOTO, K., and YOKOYAMA, G.  
Experiments on the most suitable weight for killing crossbred  
(Landrace ♂×Berkshire ♀) pigs.

鹿児島県の肉豚の大半を占める一代雑種(B・L)のと殺時期は70kgから100kgと区々であり産肉熟度の不足するもの、あるいは体重が大きくて落物となるものなどの場合が多い。そこで体重差によると殺適期、日齢差によると殺適期について昭和43年秋期から昭和44年春期まで2次にわたり試験を行ない、1、2次ともほぼ同様な結果を得たのでその概要を報告する。

## 1. 試験方法

### (1) 試験期間

第1次 昭和43年12月～44年5月

第2次 昭和44年4月～44年9月

### (2) 試験区分および供試豚

区分	と殺体重	供試数	飼料の給与区分
基準区	A区 80kg	12	ランドレース基準量
	B区 90	12	
	C区 100	12	
少給区	D区 90	12	体重20～50kgまで基準の2段階し
			♪ 50～59 ♪ 3 ♪ ♪ 59～100 ♪ 4 ♪

供試豚は生年月日および発育斉度の揃ったもので1腹平均体重の上下差10%以内のものとし、雌および去勢雄を同数選定し同腹の子豚を各区に分配した。

### (3) 飼養管理

單飼育とし、飼料および管理は豚産肉能力検定要領に準じ、試験は体重が20kgに達した時から開始し試験区分に示した各々の体重に達した時と殺した。枝肉の筋肉、脂肪、骨の割合は簡易法で、また、肉の保水性は濾紙法によって調べた。

## 2. 試験成績および考察

### (1) 発育

区分	20kg日齢	所要日数(日)							
		20～50kg	50～80kg	80～90kg	90～100kg	20～80kg	20～90kg	20～100kg	
基準区	A区 80kg	68	60	44	—	—	104	—	—
	B区 90	67	56	45	13	—	101	114	—
	C区 100	69	59	45	13	13	104	117	130
少給区	D区 90	67	69	51	12	—	119	131	—

所要日数では20kgから80kgまでにおいては、基準給与区のA区、B区、C区間に大差はみられず順調な発育を示した。少給区は基準区に比し当然のことながら20kgから80kg間で平均16日、20kgから90kg間で平均15日多く要した。

区分	1日平均増体重(g)							
	20～50kg	50～80kg	80～90kg	90～100kg	20～80kg	20～90kg	20～100kg	
基準区	A区 80kg	508	690	—	—	584	—	—
	B区 90	539	683	756	—	601	616	—
	C区 100	516	667	776	781	580	602	618
少給区	D区 90	445	589	777	—	505	529	—

1日平均増体重では基準区間内では大差はなく、少給区は基準区に比して増体重が少なかった。

### (2) 飼料消費量および飼料要求率

区分	飼料消費量(kg)							
	20～50kg	50～80kg	80～90kg	90～100kg	20～80kg	20～90kg	20～100kg	
基準区	A区 80kg	96.2	121.8	—	—	218.0	—	—
	B区 90	91.1	121.9	40.9	—	213.0	253.8	—
	C区 100	97.0	124.8	43.4	45.8	221.8	265.2	311.0
少給区	D区 90	99.6	118.4	43.4	—	218.0	252.8	—

区分	飼料要求率							
	20～50kg	50～80kg	80～90kg	90～100kg	20～80kg	20～90kg	20～100kg	
基準区	A区 80kg	3.20	3.97	—	—	3.62	—	—
	B区 90	3.03	4.06	4.38	—	3.55	3.66	—
	C区 100	3.24	4.13	4.34	4.80	3.68	3.74	3.90
少給区	D区 90	3.29	4.00	3.84	—	3.64	3.66	—

飼料消費量は基準区ではA区が80kgまでに218.0kg、B区が90kgまでに253.8kg、C区が100kgまでに311.0kgを要し、飼料要求率は80kgと殺区で3.62、90kgと殺区で3.66、100kgと殺区で3.90と体重が大きくなるにつれて要求率が高くなることを示した。少給区は基準区に比して、飼料消費量、飼料要求率において大差はなかった。

(3)と体成績

区 分			枝 肉 歩 留	枝 肉 対 する 割 合			背 脂 肪 の 厚 さ (三 部 位 平 均)	背 腰 長 (Ⅱ)	と 体 幅	ロ ー ス 断 面 積	筋 肉 の 保 水 性	筋 肉 の 割 合
				肩	ロ ー ス ・ パ ラ	ハ ム						
基 準 区	A 区	kg 80	% 72.8 ± 2.4	% 32.5 ± 1.7	% 36.1 ± 3.9	% 31.4 ± 0.8	cm 2.7 ± 0.3	cm 64.8 ± 1.6	cm 30.7 ± 1.0	cm <sup>2</sup> 16.8 ± 2.4	% 65.2 ± 7.1	% 53.6
	B 区	90	73.4 ± 1.6	33.2 ± 1.1	35.6 ± 1.1	31.3 ± 0.9	3.0 ± 0.3	65.8 ± 2.6	33.2 ± 1.0	19.6 ± 3.5	64.6 ± 5.4	54.7
	C 区	100	74.9 ± 1.5	32.3 ± 1.1	37.8 ± 1.2	29.9 ± 1.1	3.4 ± 0.2	69.1 ± 2.8	34.0 ± 1.0	20.9 ± 3.4	65.0 ± 3.3	52.2
	D 区	90	73.3 ± 2.1	33.0 ± 1.3	36.1 ± 1.6	30.9 ± 1.7	2.9 ± 0.4	66.0 ± 3.0	32.3 ± 1.7	23.4 ± 5.2	64.8 ± 5.7	55.3

(注) 1. と殺解体は湯はぎ法による 2. 土は標準偏差

と肉歩留は、80kgと殺区<90kgと殺区<100kgと殺区の順でと殺体重の大きいもの程歩留が高く、5%水準で有意差がみられた。

背腰長は、体重増加に従って大きく、と体幅は基準区80kgと殺区、少給区90kgと殺区、基準区90kgと殺区、基準区100kgと殺区の順に大となり、それぞれの間、1%水準で有意差が認められた。

背脂肪の厚さは80kgと殺区<90kgと殺区<100kgと殺区の順でと殺体重の大きいもの程背脂肪が厚くなることを示した。また少給区90kgと殺区は基準90kgと殺区に比して幾分薄くなる数値を示した。

ロース断面積は体重増加にともなって大きくなる傾向を示し、少給区は基準区に比してロース断面積が大きくなったがこれは所要日数が延び、と殺日齢が遅くなったことが大きな要因と考えられる。

ハムの割合では80kgと殺区、90kgと殺区ではおよそ31%で良好であったが、100kgと殺区はやや劣り29.9%であった。

筋肉の割合は少給区90kgと殺区が最もよく、ついで基準区90kgと殺区、基準区80kgと殺区、基準区100kgと殺区の順であった。

筋肉の保水性は濾紙法によって行なったが各区間ならびに、と殺体重の違いによる有意差はみられなかった。

以上を要約すると発育、飼料の利用性、肉質などから一代雑種B×Lのと殺適期は、90kg前後が適当と考えられる。また飼料の給与量を制限して肥育日数を延ばした少給区は肉質脂肪の厚さなどにおいて幾分すぐれた成績が得られたが有意差はみられなかった。